John H. Beynon 教授の思い出

田島 進

Susumu TAJIMA

群馬工業高等専門学校名誉教授 *Professor Emeritus, Gunma Technical College*

Professor John Herbert Beynon
(1977年9月29日 Swansea 大学の Beynon 教授の研究室にて：著者撮影)

永らく世界の質量分析学会のリーダーの一人であらせられた John H. Beynon Swansea 大学教授が、去る 8 月 24 日逝去されました。享年 91 歳でした。Beynon 教授は、1943 年 Swansea 大学を卒業後、1947 年まで軍需省に、その後 ICI (Imperial Chemical Industries) に勤務されました。その間の 1960 年には「Mass Spectrometry and its Application to Organic Chemistry (Elsevier)」を出版されました。この本は名著の誉れ高く、学術書には珍しく第 3 版まで増刷されました。ちなみに、この本の「挿絵」は、彼の愛妻 Yvonne の手描きとのこと。さらに、1968 年には「The Mass Spectra of Organic Molecules (Elsevier)」を R. A. Saunders, A. E. Williams と共著で出版しています。

1968 年には F. McLafferty が Cornell 大学に移られた後任として、Purdue 大学の化学科の教授になりました。1975 年まで勤めた 8 年間に 100 報以上の研究報告を発表しています。1973 年には R. G. Cooks, R. M. Caprioli, G. R. Lester との共著「Metastable Ions (Elsevier)」を出版されました。これら神がかり的な仕事振りには、ただただ驚くばかりです。

1971 年にはイギリス学士院の特別会員 (FRS (Fellow of Royal Society)) に選ばれ、Warwick 大学と Essex 大学の客員教授を併任なされました。1974 年には母校 Swansea 大学に戻られ 1986 年まで、世界の質量分析の「メッカ」とたたえられた質量分析研究所の所長を務められました。

永年にわたる研究内容には、IKE (Ion Kinetic Energy) スペクトル法、MIKE (Mass Analyzed Ion Kinetic Energy) スペクトル法、メタステーブルイオン幅からの KER (Kinetic Energy Release) 解析法、B/E (磁場／電場) リンクト走査法、Photodissociation 法、Electron Capture Dissociation 法、Charge Stripping MS、Angle Resolved MS 法などがあります。また、装置の開発・改良にも力を注ぎ、最初の市販高分解能質量分析計 (Nier-Johnson 型) の設計に携わり、さらに BEE 型タンデム質量分析計を製作しました。Beynon 教授は、常に「Fundamental な研究を」と口にしておりましたが、まさにいずれも独創的、かつ基本的な研究ばかりです。

多忙な研究・教育にもかかわらず、学会活動にも尽力を惜しまず、1960 年にはイギリス質量分析学会の初代会長を、1993 年にはヨーロッパ質量分析学会の初代会長を務められました。また、1985 年には Swansea 大学で開催された国際質量分析学会の実行委員長をなされ、世界の質量分析学の発展に多大なる貢献をなされました。さらに、1987 年には、学術雑誌「Rapid Communication of Mass Spectrometry」の創刊に尽力されました。これら多大なる功績に対して質量分析の最高の栄誉である Stefan Medal を 1980 年に、Thomson Medal を 1985 年に、Aston Medal を 1990 年に授与されました。

以前に日本で開催されたBeynon教授の講演をお聞きしたことがありましたが、教授と初めて親しくお話したのは、1977年にSwanseaで開催されたイギリス質量分析学会に参加した時でした。その時Swansea大学の学生C. Porterが「種々の前駆体から生じるBenzoyl Ionの生成熱の測定結果は、日本のS. Tajimaの測定値と一致していました。」との発表をしました。休憩時間にPorterに「私が、先ほど君の話に出たTajimaだ。」と告げると、目を丸くして驚き、すぐさまBeynon教授に紹介してくれました。その日の夜の懇親会では、Beynon教授は数年来の友人のごとく、親しく話をしてくださいました。スケールの大きな慈愛に満ちた教授の人柄に接し、「世の中には、こんなにも素晴らしい人がいるのか。」と、その日は興奮のあまり夜遅くまで眠ることができませんでした。

学会2日目の1977年9月28日、日本赤軍派による日航機ハイジャック事件、いわゆる「ダッカ事件」が発生した。犯人たちは、乗客および乗務員からなる人質の身代金600万ドルの支払いと日本で勾留中の赤軍派メンバー、およびそのシンパ9人の釈放など、不当な要求を日本政府に突き付けた。学会の休憩時間中は、質量分析の話題はそっちのけで、ハイジャック事件の話でもちきりでした。Beynon教授は私を見つけると、つかつかと急ぎ足で近づき、赤鬼のように真っ赤な顔をして「昔から日本人は物事に対して責任を取ることをしない。今回もきっとテロに屈し、身代金を支払い、赤軍派のメンバーを釈放してしまうに違いない。そんなことをすれば、彼らはそのお金でさらに武器を調達し、今後より多くの人命が失われるであろう。それに対して、日本人はどのような責任を取るのだ。」と大声でまくしたてた。昨日のあの優雅な面影は微塵もなく、まるで永年の仇敵に遭遇したような態度であった。Beynon教授のあまりに大きな声に「何事が起きたか？」と会場中の研究者がわれわれ二人を取り囲んだ。私を見つめる人々の目は冷たく、一人つるし上げられ、まるで針の蓆に座らされている気分でした。「確かに私も事件を起こした赤軍派と同じ日本人ではあるが、だからと言って、彼らの代わりに私をつるし上げてどうしようもないではないか。」と内心忿懣やるかたなかったが、「日本人が、皆様方に大変ご迷惑をおかけし誠に恐縮しております。」と頭を下げた。

翌日の朝、教授は私に向かって「昨日は大人気もなく、つい興奮のあまり、貴方に大変不快な思いをさせてしまった。心からお詫びします。」と頭を下げた。さらに、「今後、君をSusumuと呼ぶから、君も私をJohnと呼んでくれ」と言われた。それ以降、Beynon教授とは、Susumu, Johnと互いにfirst nameで呼び合う仲になりました。その後、ダッカ事件は、Johnが心配したように、当時の福田首相が「人命は、地球より重い。」と言い、身代金を支払い、特別立法で勾留中の囚人を釈放し、人質の解放となりました。

「一度はJohnの研究室で」との思いが絶ち難く、1982年、夏休みを利用して1月間、SwanseaのJohnの研究室で過ごさせていただきました。当時はPhotodissociationの研究の真っ最中で、留学生であるBelgrade大学のT. Astの弟子であるM. Rabrenovicが、朝から晩まで実験に明け暮れていました。私もその測定的一端を手伝わせていただきました。週に一度、J. Harris, G. Brenton, M. Rabrenovic, R. Morganら研究室のスタッフ一同が集まり、ミーティングが開かれました。私が滞在した1月の間、Johnは公務多忙中にもかかわらず一度もそれに欠席したことがありませんでした。スタッフが抱えている問題点の議論が行き詰ると、それまで黙って聞いていたJohnはおもむろに「その点はこのような実験を試みたら。」「このように考えたらどうだろうか。」などと助言をしていました。その指摘は誠に適切で、いつも感心させられました。

また、Johnは非常に几帳面な性格で、今までに発表した論文リストや今後発表予定の論文の題目（当時で約400報）や、研究室を訪問した研究者名などを、大学ノートにぎっしりと記入しておりました。訪問した日本の研究者の中には、東レの酒井郁男さんや東工試の丹羽吉夫さんの名前がありました。

Johnはスポーツにも興味をもっており、ある日、ラグビーの試合に誘ってくださいました。今でもウィングラスを片手にroyal seatで見たライトに照らされた緑の芝生の美しさと、子供のように声を張り上げて応援していたJohnの姿が目につきます。試合後、ワインで酔っていたにもかかわらず大学の近くのホテルまで真っ赤なスポーツカーで送ってくださいました。「事故を起こさなければいいんだ。」とのことで踏切でも一時停止せず、かなりのスピードを出しての運転でした。最後の土曜日の晩には、Harris, Brenton, 私の三人をディナーに招待してくださいました。奥さんのYvonneは体調を崩されているとのことでしたが、多くの手料理を用意して私たち三人を心より歓待してくださいました。体調不良のためか少し弱々しく見受けられましたが、Johnに相応しい気品のあるイギリス婦人でした。

横浜市立大学の高山光男さんからJohnの訃報のメールをいただき、驚きと悲しみで一瞬目の前が真っ暗になりました。心からJohn H. Beynon教授のご冥福をお祈り申し上げます。